



## 米づくりに情熱を燃やす 一人の青年 — 新しき村 —

2月11日に行われた宮崎県木城町と、毛呂山町との友情都市盟約を記念して、新しき村に暮らす人びとを3回シリーズで特集する。

新しき村は農業による自活を進めている。今回は、稲作を担当している小田切正雄(40)さんと倉敷幸児(31)さんに話をうかがった。

小田切さんは、父親の仕事上、転勤が多くて、あちこちを転々としていた。ちやうど帯広にいらるころ、本屋で武者小路実篤の書いた本に出会い、入村を決意したと温かみのある口調で語る。倉敷さんは、県内育ちで、浦和の図書館で実篤の書いた本に出会い触発されたと少し緊張気味に話す。読書が好きで、新しき村の機関紙にも寄稿しているという。

二人は、2町5反(約2万5千平方メートル)ほどある村の田んぼを耕作していて、米の無農薬栽培に取り組んでいる。寒い時期から田んぼの土づくりを始め、肥料には米糠や籾殻の灰を使っている。苗づくりも種籾を1か月ほど冷水に浸けるなどして鍛え、中苗まで発育させてから田植えをしている。無農薬のため、稚苗の状態で植えると稲水ゾウムシなどに食べられてしまい、見るも無残な姿になってしまうので、そつし

ているという。

5年ほど前の冷夏に、周囲の田んぼでイモ子病が大量発生したことがあったが、育てた苗は、被害が少なかった。このときは、丈夫な苗を育てる大切さを実感したという。また、「新しき村の田んぼでは、除草剤を使用しないので、手取り除草が大変である。暑い時期に中腰で、下を向いて行う作業は、とてもきつい。でも、豊かになりつつある生態系の中の種々の生き物との出会いが、せめてもの慰めである」と語る。

「米の栽培は、そんなに儲からないけれど、自然を守っていくためにも、続ける価値がある仕事だと思っている。また、「いくら無農薬でもおいしくないと買ってもらえない。これからもおいしい米を作り続けたい」と笑顔で答えくれた。



写真左が小田切さん右が倉敷さん

## 毛呂山歴史教本

### 文化財シリーズ 182 毛呂本郷と毛呂宿 の歴史

～江戸時代の宿場を歩こう～

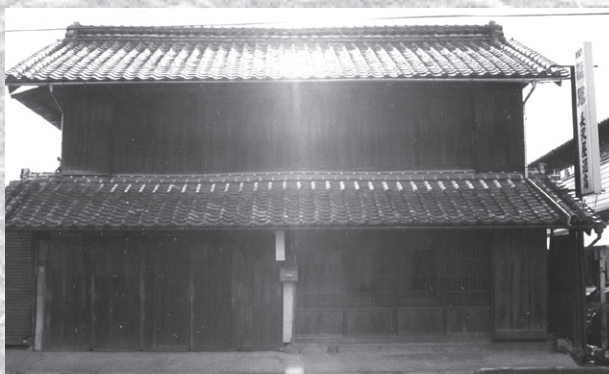
現在の毛呂本郷地区は江戸時代、「毛呂宿」と呼ばれ、八王子と上州(今の群馬県)を結ぶ八王子往還(現在の県道飯能寄居線とほぼ同じ道筋)の町場として、越生とともに栄えていました。

往還沿いは、上町、中町、下町と呼び分けられています。以前はそれぞれ上宿、中宿、下宿といい、周辺の小字にも宿、本宿、宿口、西裏(宿の西の裏の意といわれている)などという地名が残されていて往時の様相を思わせています。

天保9年(1838)、江戸幕府の巡見の折に提出された「村差出明細帳」には当時の村の様子が記されています。村の広さは東西5町程(約545メートル)、南北8町程(約872メートル)、幕府からのさまざまな通達を掲示する高札場が1カ所、家数は67軒、住人は289人となっています。往還沿いの町並みは今も両側に間口が狭く、縦長の住

宅が短冊状に立ち並んでいます。これは家屋が立て込んでくると1軒あたりの間口が決められたためにできる町場特有の家並みです。中には古い建築様式の家もあり、絹問屋を営んでいた「問屋」、寺子屋だった「お師匠様」などという屋号なども今に伝わっています。

毛呂宿の成立時期ははっきりわかかっていませんが、中世鎌倉時代よりこの地を治めていた毛呂氏の居館が往還沿いの榎の所にあつたとか、毛呂宿に程近い大字岩井馬場(同氏の館があつたという伝承もあり、領主である毛呂氏のもとに毛呂宿という町場が成立していたとも考えられます。歴史深い宿場町を訪ねてみてはいかがでしょう。



古い趣を残す家